



新 尚一 (あたらししゅういち)
神栄株式会社 相談役
1964年・商学部卒

明るい未来を信じて

昭和29年(1954) 4月
1日、前日の雨も上がり、甲山を背にした時計台の見える正門の満開の桜をくぐり、新中学生在母親とともに集まってきた。関西学院中学部の入学式の日である。

思いがけず入試に合格し、期待に胸ふくらませて輝かしい世界に大きな一歩を踏み出した興奮は、今もはつきりと思い出す。それから10年間、男子ばかりの学院で思い切り遊んだ。学業も決して楽はさせてくれなかったと思うが、小学校とは違い担当教科ごとに先生が変わることが珍しく、また先生もそれぞれに個性があり、独特の教え方で学問の楽しさを知ることが出来た。

学校の行事でのキャンパス生

活、友達と夜中じゅう話し合ったこと、図書館で好きな本を読みふけたこと、中央芝生で青空に浮かぶ雲を眺め、人生を考えたりと、気ままに楽しい学生生活であった。

しかし世の中は戦後復興が軌道に乗り始めたとは言え、一般的にはまだ貧しく贅沢ができる時代ではなかったが、心はいつも明るく前向きで将来への夢をもち、友人といつも熱く語り合っていたことを思い出す。

関学での多感な青春時代の10年間は上ヶ原にあり、青春の出来事を振り返ると、記憶の壁に隠れていた出来事が改めて新鮮に甦り、愉しかったことばかりが出てくる。朝の矢内コースマラソン、チャペルでの礼拝、クリ

スマスキャロル、個性あふれた先生の授業、陸上、剣道、アメリカンフットボールなどのクラブ活動や合宿、友人との遊びと語りなど、それだけでなく、絵画や詩文の楽しみを教わり、また物理や化学への興味からいつも満点を取ることが出来たのも、魅力あふれる先生が多かったことによる。

一粒の麦が地に落ち芽を出し実をつける。そのために必要な栄養がこの関学での青春時代であったと思う。まさに青春を謳歌することができた時代が、あいて歩くことを学べたのが、その後の人生形成に大きな影響があったと感謝し、この幸せを大事にしたいと思う。